

## グローバルパートナーシップの展開 —Cullowhee Valley Schoolを尋ねて—

鳴門市立第一小学校 教諭 藤本 景子

### (1) Cullowhee Valley Schoolの概要

スモーキーマウンテンの麓、ノースカロライナ州西部ジャクソン郡に位置し、近くにはW. C. U. (ウェストカロライナ大学)がある。保護者には大学関係者も多い。PreK～8年生まで、生徒数は約600名である。PreKのみ1クラス、他の学年は各3クラス、1クラス20～27名である。3年以下は、アシスタントティチャーがつく。校舎は平屋で、7年前に建てられた。地域の産業は、農業。保護者の3割は社会的・経済的に恵まれているが、残り7割は社会的弱者である。Ron Yount校長は、今期で退職されている。

### (2) 授業を通して見たアメリカの教育 —Fair—

#### ① 早期教育

保育所・幼稚園から、教師によるSpeaking・Reading・Writing・数の教え方から、絵の描き方・ハウスキーピングに至るまで、個別指導がなされている。これは単なる早期教育ではなく、家庭に教育力が無い場合、それを補うためのものではないだろうか。すべての子どもに平等な教育の機会を与えるため、スタートラインを同じにするためではないかと考える。

#### ② 基礎・基本の重視

個別指導が徹底されているだけでなく、プリントや様々な教育機器を使った評価が絶えずなされている。これは、子どものつまづきをできるだけ早い段階で見つけ矯正するには望ましい。授業も工夫されており、歌や動作化・ゲームなどを取り入れ、生徒の学習意欲を高めている。

#### ③ 個性の重視

ハンディキャップも高い能力も個性と受け止められており、その個性にあった教育が受けられるようにカウンセリングや特別クラスの設置など、ソフト・ハードの両面から様々な配慮がなされている。

#### ④ 子どもの姿

ほとんどの生徒はスクールバスで通っていて、放課後子ども同士と一緒に遊ぶといことは困難である。また学校生活でも休み時間や学級活動(朝や帰りの話し

合い・学級会・レクリエーション・係り活動等)の時間がなく、子ども同士のつながりが希薄に思われた。幼稚園や保育所でも、室内での保育が主であり、子どもが自由に外で遊んだりする姿を見かけることがなかった。学校は純粋に学習の場であった。

1年からクラス全員での話し合いを授業の中心とする日本と違い、低学年は個人指導とグループ学習が主で、高学年になるに従って話し合い活動も取り入れられると聞いたが、活発な討論などは見られず、教師主導の授業が多かった。中・高校のテーマ学習になると、その評価や話し合いも担当教師と行い、予想していたようなディベート中心の授業ではなかった。ただし、Speakingの指導は幼児から行われ、正確な米語を話すことが、基本に据えられていた。多民族国家ですべての国民が米語が話せるとは限らないアメリカでは、切実な問題なのだろう。

生徒は学校生活のルールを遵守し、教師に対しても従順である。現在の状況に対する不満は見られないのは、それが一般化されているせいだろう。しかし「高校に入ると途端に悪くなる」のだとすれば、やはり子どもにも抑圧感があり、それが自由を認められる年代になると一気に発散されるのかもしれない。

#### ⑤ 国際理解

1年は地域・2年はノースカロライナ州・3年は…というように、各発達段階に合わせた教育がなされている。Social Studyやテーマ学習として、国や地域について調べるときは、地理・歴史・文化・政治・経済等を総合的に組み合わせて学習されている。また単に書籍やネットでの資料収集にとどまらず、地域のジオラマを作ったり、その国の本を読んだり、音楽を鑑賞したりと、その国を知るために様々な手法が取られている。今回の私たちの訪問に先立ち、“SADAKO”をはじめとする日本の物語や民話の本や紙芝居を集めたり、建造物や庭園のミニチュアを飾ったり、掛け軸・人形・鎧・民族衣装等の収集、折り紙の実践、日本語や俳句の研究がなされていた。

今回の“Celebrate America Celebrate Japan”と

いう Assembly では、アメリカが多民族国家であるということから、そのルーツとなる民族や国の踊りが紹介された。チェロキー・ガーナ・メキシコ・中世イングランド・アメリカのラインダンス（現代の若者のダンス）・アパラチア地方のクロッキングダンス・チアリーダー等である。どれも自分たちとどのような関わりを持つかという目的意欲が明確にされているように思った。日本については国歌『君が代』の紹介・阿波踊り・日本の民謡調オペレッタ “The Stone Cutter” の上演、その中で『さくらさくら』の合唱演奏も行われていた。机上の知識だけではなく、このような様々な実体験を含む試みが、他の国を理解するのに非常に有効であると思われた。ただし、着物等の資料の収集など、日本の現状では財政面等で困難だとも思われた。

### (3) 日米の学校組織の違い

Callowhee Valley School の組織は Principal, Assistant Principal, Prekindergarden ~Sixthの教師, 7th~8thのMath, Social Study, Science, Language Arts, Vocation の教師, Art, P. E., Academically Gifted, Music, Exceptional Children, Speech, の専科教師およびGuidance Counselor, Librarian, School Nurse, New Century Scholars, Social Worker, SOS, 等である。またRemediation, Title 1, PK~ThirdにはTeacher Assistantがつく。EC(障害児)にはTeacher AssistantだけではなくAssistantもつき、ECに関する教師数は12名に及ぶ。(特別な学校は存在せず、同一地域の子どもはすべて同じ学校へ行くため、個に応じた対応ができるようになっている) その他 Secretary, SIMS, Custodian, Cafeteria Staff, Bus Driverと様々な役割を持つメンバーで構成されているが、各自の資格によってその職責は明確に分かれている。

例えばアシスタントティーチャーの役割は授業準備や授業の補助、個人指導やグループ指導であり、授業をするのはあくまで担任の役割である。担任不在時に関係教師による協力体制はなく、学生インターンや保護者によるボランティアティーチャーに授業計画を渡して依頼するそうである。これは日本に比べて教師の専門性が強く、教師の担任学年が変わったりすることがほとんどないためであるとも考えられる。また、学校間での教師の移動もなく、人事や学校運営での校長の権限が非常に強い。

学校での研修組織はなく、個人が教育委員会や研修機関の研修に参加して、その能力を高めている。職員室はなく、職員全体で学校運営について話し合ったりすることもほとんどないようである。

### (4) 授業を通して

#### ① 授業実践 (日本の文化の紹介)

授業1 日本の遊び 3月27日 (6・7年)

- ・日本の文化を紹介する様々な展示とQ&A
- ・パワー・ポイント “ITISYO-KIDS LIFE”

(OHPシート)

平均的な小学生 (高学年) の一日

第一小学校児童へのアンケート

(学校生活の楽しみ、塾や習い事、小遣い、学習時間、余暇の使い方)

- ・やってみよう

剣玉、だるま落とし、竹トンボ (紙トンボ) の制作

授業2 書写 3月28日 (4年)

3月29日 (6・7年)

- ・漢字の成り立ちと漢字ゲーム
- ・習字に挑戦『山』(水書用紙・半紙)
- ・大きな字のデモンストレーション (夢・道)

授業3 折り紙 3月28日 (7年)

- ・折り紙の説明と展示

(せみ、はと、折り羽鶴、風船、金魚、百合、ウサギ等)

- ・折り紙を折ろう

(せみ・金魚・折り羽鶴・風船)

#### ② 授業を通して

授業としては、その他『日本の民話の紹介』や『まど・みちおの詩の世界』として授業計画をたてていた。しかし “Celebrate America Celebrate Japan” のため、各学年で日本の勉強をしており日本に対する知識は豊富であり、それぞれが私たちに具体的に授業を要求してきた。たとえば7年は『SADAKO』や折り紙について勉強しており、兜や鶴などは制作済みなので、もっと高度な作品を折りたがっていた。その他、書道のように、知識はあってもアメリカでは実践しづらい授業を依頼された。

生徒ばかりではなく教師も初めての体験に夢中になっており、この未知なものに対する知的好奇心や知

的探求心が大切だと実感させられた。

#### (5) 今後の交流計画と課題

AssemblyでCullowhee Valley Schoolから友好のプレートをいただいた。それは現在第一小学校の正面玄関に飾られている。今回Kris Batesの訪問を期に、両校の間で協定を結ぶことができた。

生徒の手による日本や学校生活を紹介する絵、日本の音楽やダンスのテープ、英訳の民話や古典の本を送る交流を続けている。しかしメール等の交換では、特定の教師によるものでしかない。パワー・ポイント“*ITISYO-KIDS LIFE*”のように、両校の生徒の生活を統計学的に比較しようという提案もBatesさんからあったが、家族数や住居の部屋数の比較が課題にあがるなど、日米の意識にずれがある。その他、日本の生徒による日本紹介、Cullowhee Valley Schoolの生徒によるアメリカもしくはノースカロライナの紹介の交換も、提案にあがっている。自国を知り、他国知り、両

国を比較することによって、互いにそれぞれの国の良さや特徴を再認識することができ、有意義な経験になると考えている。またその後それぞれに、相手の国に対する感想や疑問を交換することによって、さらに新たな視点で自国や他国を見ることができるようになるに違いない。

しかし、問題点として言葉の問題が持ち上がっている。文書の交換は英語になると思われるが、英語教育がなされていない小学校の現状では、英訳は一部の教師の役割となり負担が大きい。また、生徒個人間での親密なメールの交換は不可能である。理想としては、本プロジェクトが継続発展され、教師だけではなく生徒間の訪問も可能となることが望ましい。私がアメリカで学んだように、現実に他国を見・体験し・感じることで、価値のある国際理解はないのである。本プロジェクトに参加できたことを感謝し、両校のさらなる交流のために力を注ぎたいと思う。

## グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト 米国現地研修ジャーナル (2001年3月25日 - 4月3日)

鳴門市立第一小学校 教諭 藤本 景子

3月25日 (日)

前夜の就寝が遅かったにも関わらず、早朝に目が覚めてしまった。外を見ると、とても良い天気になりそうだった。テレビをつけ、英語のニュースを聞く。日本の地震についての報道もあったが、ごく短いものだった。しかし、心配したほどの被害でもなかったようで、安心した。日本に、電話をかける。思ったより通信状態も良く『お母さん、本当にアメリカ?』という子どもの疑問につい笑ってしまう。日本とアメリカはとても遠いはずで、私がここにいるのは非日常なのだが、日本ではいつもどおりの家庭生活が営まれている。漏れ聞こえるテレビの音、祖父母の話し声、私自身もアメリカだという実感があまりわいてこなかった。早く周りの様子が知りたくて、どこかでアメリカンブレックファーストを味わいたくて山田先生と一緒に散歩に出ることにした。

ロビーでは世羅先生・小野先生・近森先生がミーティング中だった。部屋を出ると少し肌寒く、山田先生にウィンドブレーカーを貸してもらう。山岳地帯特有の天気、気温は低くさらっとしているが、日ざしは強い。小鳥の鳴き声が聞こえる。小鳥の巣を見つけることができなかったが、木の枝をつたうリスを見ることができた。茶色のリスで、日本でよく飼われているシマリスではない。マディソンホールは、ウェストカロライナ大学の広大な敷地内にある。高台を下りて、ショップのあるところに行くが、開いていない。車が一台も通らない。学生はどこに? と考えて、今日は日曜日だったことに気づく。ピンクの花が咲いた大木があった。花は桜に似ているけど、樹形が違うなどと話しながら近づくと、驚いたことに本当に桜であった。日本の桜は団扇型だが、アメリカのそれは、もみの木や杉の木のような樹形で10メートルをこえる高さがあった。同じ木でも、日本とアメリカではこんなに違うんだと感慨深かった。しかし諦めていた花見がアメリカでできたことを、嬉しく思う。他にもしだれ桜など、大学内にはたくさんの桜が咲いていた。車が何台か通る。行き先は教会である。大学の敷地内にいくつかの

教会がある。これも日本とは違うところである。

午後はみんなで、児童の美術展を見学に行く。多くは家族で見学に来ている。犬を連れてくる人も多い。今日の受賞者だろうか、6・7歳ほどの女の子が髪をアップにし、ロングドレスでドレスアップしている。ピアスにネックレス・リング・紗のストールをまわって、まさに小さなレディである。作品は針金細工・発砲スチロールで作ったドールハウス風・楽焼き・コラージュ・ポスター・お面と多彩である。日本とは違い素材や学年別の展示ではなく、部屋を飾るという感覚である。作品の傾向として水彩画はほとんどなく、様々な素材を組み合わせたものが多い。またA4ぐらいの大きさのものが多いが、大きさは一定ではない。絵画は、あまり時間をかけていないように思える。明るい色彩のものが多い。それぞれの作品には手書きのプレートが付けられている。上から順に受賞者の名前・学年・学校名・指導者の名前・素材である。作品名が書かれているものは、ほとんどない。日本の画一的な作品展とは違うと思ったが、詳しく見ていくうちに同種の作品も多く、それらは同じ教師の指導によるものであることに気づいた。

表彰式でも、生徒は教師とともに表彰を受けていた。日本なら、指導者というものは公に名前を出されることは少ない。もちろん学校名や学年により、誰が指導したかを推測したりはするが、明記されることはない。美術教師がいない小学校だけではなく、中学校や高校でもそうだったように思う。アメリカでは教師の評価として、統一試験の結果が重視されると聞いた。スポーツのコーチなら、その試合結果だろう。美術では指導者の名前を出すことで、教師を評価しその能力を認めているのだろうかと考えた。

3時、W.C.U. グループの日程説明とレセプションで踊る阿波踊りの練習。Cullowhee Valley Schoolは私と山田先生の二人であるため、通訳が付かなくなったという話を聞いて不安に思う。5時、湖畔のレセプション会場へ向かう。そこで日本の方を見つけた。三枝子(Mieko Thomson)さんと話しているうちに、通訳が

いなくて心細いなら都合がつけば来てくださることになった。この調子で通訳をGETと張り切ったが、この地方では日本語のできる人は少なく、そのほとんどはすでに通訳の約束ができていた。明日訪問するFairview elementary Schoolの生徒によるダンスを見学後、ステップを習う。タップダンスに似ている。私たちは阿波踊りを披露する。そのときの団扇やはちまきが興味を引いたみたいなので、プレゼントした。編み笠をかぶって、写真を撮っているアメリカの女性もいた。宿舎に帰り夜食をとりながらミーティング、アメリカの第1日目が終わる。

### 3月26日(月)

高木先生・森先生と合流。車中の高木先生が着替えているのを見て、迷子になっていたトランクが見つかったのを知る。みんなで大学のカフェテリアで朝食をとる。ここではすべてバイキング形式で、入るときにレジでお金を払う。私は勝手が分からないので、いつも小野先生や高木先生の様子を観察して、そのまねをするようにしている。コインの大きさも様々で数字が書かれていないものもあるので、面倒である。

9時、学校を出発。15分ほどでFairview Elementary Schoolに到着する。アメリカの先生が英語で『小野先生は、どうしましたか』と訪ねている。『小野先生は、車を駐車場にとめてから、すぐ来られます』答える世羅先生は日本語である。“I see.”ということで、言葉のニュアンスというものは、心をこめて言えば通じるものなんだと、英会話のできない私は少し安心する。手話による歓迎のセレモニーの後、校舎を案内していただいた。

この学校の建物は、すごく個性的である。メディアセンター(図書室)をハブ(中心)として、それを取り巻くように6個のポット(エンドウ豆のさや)といわれる円形の部屋が配置されている。どの教室からもメディアセンターに行けるようにとの配慮である。そこには本だけではなく、教科書や生徒の作品も置かれているそうである。オープンスペースで、各クラスは本棚などで区切られており、各教室はパイの1切れのような形になっている。29日にはカリキュラムフェア(学習発表会)があり、今年のテーマは“writing”だそう。どの学年も、その準備に追われていた。幼稚園は、フロアと同じポットにあった。K1(年少)は、

コンピューターで遊んだり、ままごとをしたりしている。K2(年長)は一つの机に4~5名が座り、各グループで絵を描いたり、時計や絵と数字の対応のプリントを解いたりしていた。これは日本では1年生の算数に相当する。部屋は狭く、遊び道具も少ないように思われた。

外に出ると、そこには野外活動場があった。高台に設けられたバードウォッチ用のテラスから下を眺めると、自然林の中には散策用の小道があり、所々にベンチが見える。小川も流れており、小さな滝や池につながっている。丸木の橋が架けられており、熱心に川面を観察している子どもたちもいる。バタフライガーデンや野生の花エリアや花壇もあるそうだ。ネットが張られているのは、虫のエリアだろうか。そのとき活動していたのは4年生で、自然を観察したことを詩にするためだという。日本でもよくする活動であるが、それは詩や俳句を作るために自然の中に身を置くというスタンスをとる。五感を通じて自然から得た感情や感動を、表現するのである。科学的な観察から得た客観的事実は、低学年では作文で周りの様子を詳しくするときに利用し、高学年では説明文として表すことが多くなる。この活動は、理科と国語の統合になるのだろうか。科学的知識を詩の形式で表すというのは、英語の特質からかも知れないが、おもしろい発想だと思った。

4年生はパワーポイントを使ってプレゼンをしていた。地理の学習では、地図から距離を測るということで、算数につながっている。その生徒も、コンピューターを操作しながら個別学習をしていた。6年生はアラバマのナサのスペースキャンプに参加中だそうで、会うことができなかった。7・8年生は酸性雨検査の地球的規模のプログラム(グローブプログラム)に参加しているとのことで、ここでもインターネットをはじめとするコンピューターが活躍している。幼稚園から8年生まで、どの教室にもコンピューターが置かれ活用されている現実に、アメリカの情報教育の一端を見た。

その後は自分の担当学年分かれての研修である。私が配属されたのは、1年生である。ランチの時間なので、子どもたちは廊下に1列に並んでいる。先生に一人ずつ手を消毒してもらって、カフェへ。ここでも子どもたちは1列に並んで、静かに移動している。自分

でランチボックスを持ってきている生徒と、学校で買う子とが半々ぐらいだった。バイキング形式で、自分で好きなものをもってレジに行き、お金を支払っている。アイスクリームやケーキなどのおやつも充実している。ランチの場所は決まっていて、先生の近くの席にみんな座っている。私たちは後で先生方との会食が設けられているそうである。食事は時間によって入れ替えられるため、おしゃべりもほとんどせず行儀よく食事している。食事中的子どもたちに話しかけるのも躊躇われて、手持ち無沙汰だった私は、ファイルを広げてメモを取り始めた。すると、ファイルに挟んでいた銀紙の千代紙で作った折り羽鶴を子どもが見つかり、欲しかったのでプレゼントした。その子が仲のよい友達の方も欲しがり、他の子どもにも見せびらかしたので、小さな騒ぎが起こった。日本人は珍しく、子どもの関心の的なので、言動には注意しなければと反省した。

昼食後すぐに国語の授業、まず『私の宝物』の発表。女の子がクマのぬいぐるみを抱いて話している。次の男の子は、私に鶴をねだった子だった。『これが、ぼくの宝物です。日本人にももらいました。羽がきらきら光って、とてもきれいです。家に持ってかえって、みんなに見せたい。ずっと、大事にします』さっきの騒ぎに少し落ち込んでいた私は、救われた気になった。その後Q&Aで、質問を受ける。“どんな家に住んでいるか”“日本の子どもたちは、学校でどれぐらいいるのか”“先生の名前を日本語で書いてください”“犬は飼っているのか”“なぜ夜つりをするのか”等、黒板に絵や時を書きながら説明する。小野先生が英語に通訳して、私の説明を補ってくださる。どうやら、日本に滞在経験を持つ家族がいるようである。米軍にいた祖父から話を聞いたようだった。『日本語を教えてください』と言われて『おはよう』『さようなら』の挨拶を言ったが、発音が難しいらしいので、『YESはHAI(はい)と言います』と黒板にローマ字で書いたが、これは分かりやすかったようだった。

会食の時、1年生や司書の先生と同じテーブルになるよう配慮してくださった。小野先生も同席しておられ通訳してくださったので、色々な質問に答えていただくことができた。詳しくは、別のレポートで述べる。

昼食後、Smoky Mountain High Schoolを訪問する。Cullowhee Valley School・Fairview Elementary

Schoolの子どもたちも、この高校へ進学する。Kenneth Nicholson校長先生の案内で、校内を見学する。まず、カフェへ入る。先生方は首からIDカードを吊っており、それで食堂の精算やラボでの使用ができるそうだ。キャリア カウンセラー ルームで、学校や進学制度の説明を受ける。日本の高校とは違って単位制であり、複線型の教育制度を持っている。90分授業であり、生徒がその進路や関心に応じて授業を選ぶところなど、日本の大学の制度と似ている。実際、高校生がW.C.U.で授業を受けたり、反対に高校の単位がW.C.U.の単位となったりすることもあるそうである。ただし全員必修の科目もあり、エイズやスモキング・ドラッグなど健康に関する授業もそれにあたる。

教室を回りながら感じたことは、生徒の学習意欲が高いことである。日本に比べて不本意入学が少なく、個人が自分の進路について目的意識を強く持っているせいではないだろうか。また、教育設備が充実している。コンピュータールームというのではなく、ほとんどの教室に全員が使用できる数のコンピューターが設置されている。たとえば、生物の授業ではコンピューターをランでつなぎ、それぞれが勉強しあえるようになっていた。パワーポイントを使った授業も多い。日本では大学院の授業でも見たことのない機械とコンピューターを組み合わせた授業もされていたが、機械に疎い私はうまく説明することができない。どの教師もプロフェッショナルとして授業にのぞんでいるようだった。工学科ではソーラーカーや家をつくって売ったりと、これも日本では考えられないような大きな取り組みがなされていた。演劇の授業もあり、私たちのため一部上演してくれた。学校を回りながら、校長先生は絶えず教師や生徒に声をかけている。教師・生徒を合わせて千人を超えるが、そのほとんどを見知っているようであった。

学校を一巡後、図書室で休憩をとる。空き時間の先生方と、引き合わせていただいた。Q&Aの時間をとってくださったので、国語(英語)の先生に授業の進め方について質問を浴びせる。このときは高木先生に通訳していただいた。その先生は自分の教室に案内してくださり、生徒のポートフォリオを見せながら、詳しく説明してくださった。途中で時間切れとなり、慌ただしさの中先生の名前を聞き漏らしてしまったのが後悔される。この詳細も別に述べる。その後W.C.U.の

副学長を表敬訪問する。

夕食は大学のカフェでとる。明日の朝食のために、タコスを買う。ここでの頼りは塩田先生。中身は注文になるので、指さしながらしゃべれば片言でどうにか通じるようである。ただ『あまり辛くないようにして』ということで“hot”という言葉を使ったが、これは“暖かい”と受け取られたようだった。『オープンにかけるのでそれは無理』と返されてしまった。みんな慣れていないので、注文に時間がかかる。カウンターの男性二人は、それもユーモアで受け止めてくれたようだが、奥の女性のため息が聞こえる。他のお客さんがいなくて、本当によかった。“take out”（持ち帰り）という言葉が通じない。高校の英語教諭である塩田先生は、この言葉で授業を組み立てたこともあるということで、何故通用しないのか真剣に悩んでいる。後で小野先生に尋ねると、その言葉は間違っていないが、この地域では“to go”というのが一般的であると教えられた。英語と米語の違いだけでなく、地域によっても言葉の使われ方に違いがあるのだと考えさせられた。日本の方言やなまりみたいなものだろうか。ちなみに“hot”は、“暖かい”“辛い”の両方があり、地元の人たちもよく勘違いして私のときのような会話がされるときも多いそうである。

夕方、1回のロビーでミーティング。明日はいよいよAnne先生の待つCullowhee Valley Schoolの訪問である。山田先生と簡単な打ち合わせをして就寝。その夜は期待と不安で、何度も夜中に目が覚めた。

### 3月27日（火）

7時30分、Anne先生の車でCullowhee Valley Schoolへ向かう。Anne先生は赤のロングドレスに黒いジャケットと帽子、首には赤いスカーフ、大きなイヤリングをつけている。どこかに出かける用事があるのかと思ったが、どうやらこれが先生の出動スタイルらしい。アメリカの先生は、きちんとした服装でなくてはいけないようだ。車で林の中を5分ぐらい走ると、学校が見えてくる。建物は平屋で、近くには小川が流れ、自然の中のとて美しい環境の中にある。しかし、キャンパスから学校まで他の建物が一つも無かったので、子ども達はどこから集まってきているのか、不思議に思う。正面に『ようこそ、山田先生 藤本先生』という日本語の横幕を見て、嬉しく思う。私たちを見

つけた子ども達が『オハヨウゴザイマス』と、挨拶をしてくれる。玄関ロビーには日本を紹介する書や人形が飾られており、日本に対する関心の深さを感じた。正面の購買で文房具を買ったり、朝の登校時はやはり騒がしい。校長先生や警備員の人が、笑顔でみんなに挨拶している。

最初にAnne先生の部屋へ行き、そこで今日の日程表を渡される。『アメリカの教育現場の様子を見せてください』と日本の本部から連絡があったそうで、そのため私たちの授業の時間を少なくしたと、Anne先生から説明を受けた。

予定表を下にあげる。アメリカの学校には休み時間というものはなく、学校統一の日課表もない。チャイムの音は、聞こえない。教師が時間割を決める。生徒は時間割ノートを持っている。変更があったときは、学校放送される。生徒は次の授業のため教室に急いでいるが、走ったり騒いだりせず、とても規律正しい。それは、小さいときから厳しく教えられるそうだ。Anne先生は、日本の学校の騒がしさに驚いたそうだ。授業中おしゃべりしたり、廊下を走ったりすることは、許されないらしい。でも日本では“RUN RUN RUN”である。小中学校ではアメリカの学生が礼儀正しいが、高校になるととたんに悪くなる。酒や麻薬に手を出す者もいると、嘆いておられた。反対に日本では年齢が上がるに従って、礼儀が身に付いているので、見習わなくてはとおっしゃられた。Smoky Mountain High Schoolの生徒の授業態度がとてもよかったことを言うと、あの学校は特別であり、都会の多くの高校はそうでないということである。私たちが見た学校だけで、アメリカの学校や教育について知ったわけではない、

#### TUESDAY'S SCHEDULE

8:00-9:00	LOUGHLIN (AG)
9:00-9:15	FISHER (音)
9:15-10:00	TYE (K1)
10:00-10:30	MIDDLETON (1)
10:30-11:15	BARTLETT (3)
11:15-12:00	HALL (6)
12:00-12:40	LUNCH
12:40-1:30	FOUTS (6)
1:30-2:00	ART (3)
2:00-2:30	COMPUTER/LIBRARY
2:30-3:00	LOUGHLIN

ステロタイプのとらえ方にならないように、注意する必要がありそうである。

山田先生と私は、最初に学校集会みたいなものがあった、そこで紹介されるだろうと思っていた。そこで、自己紹介の短いスピーチの後、山田先生の学校の1日と日本の生活(行事や武道等の文化)のビデオを流し、その後私の作った、『ITISYO KIDS LIFE』のOHPを使い、平均的な5年生の1日を例にとって、日課表や好きな教科・1～6年生の勉強時間・塾や習い事調べ・お小遣い等のアンケート結果を説明しながら、日本の子ども達の生活を紹介しようと思っていた。その他、書道の色紙や絵はがきも用意し、時間があまったならば、横笛で阿波踊りのお囃子を吹いたり、日本の遊びの紹介としてだるま落としや剣玉・あやとり・手合わせの実演もしようと思っていた。しかし、そのような時間はなく、肩すかしにあった気持ちでした。Anne先生に書道の授業はできるかと尋ねられたが、それは明日に計画していたので、今日は日本文化の紹介の授業をすることを告げる。

教室は日本の教室と同じぐらいの広さで、出入り口は廊下側1カ所のみ、窓も細長いのぞき窓のようなものが一つだけである。空調や冷暖房の設備が整っているためと、盗難等の危機管理のためだろうと推測する。教室の前にはホワイトボード、日本の着物がいくつもかけられた衣装ラック。聞けば先生の向かいの小部屋は、衣装部屋になっているそうである。壁にはAnne先生が日本から持ち帰られた写真や絵や色紙が飾られている。その他、ネイティブ アメリカンなど、今までの勉強の結果が示されている。小さな教材準備室も隣接されていた。Anne先生と助手の先生、それとカウンセラーの先生も同席していた。

校内放送で挨拶の後アメリカ国歌が流されると、子ども達は手を胸に当てて歌い始める。その後、国民の心構えのようなものを暗唱する(宣誓)。これはどこの学校でも行われており、国民として当然のことらしい。考えてみると、私たちは生まれながらの『日本人』という意識を持つ者が多い。しかしここアメリカでは、アメリカ国籍を得て『アメリカ国民』となる。国民感情を高め、国家に対する忠誠心を持たせることも、教育の大切な役割なのだろう。どの教室にもアメリカ国旗が掲げられている。また見回せば、州旗やスクールシンボルやロゴの入ったTシャツ・文具等の日用品な

ど、その類のものは至る所にある。アメリカの人々にとって、帰属意識というのはとても大切なものらしいと感じた。

私たちの授業。まず後ろの長机に日本を紹介する小物を並べる。簡単な自己紹介の後、それらの小物に対する質問をうけながら、日本の文化や生活についての説明をする。次に実際に日本の遊び道具を試してもらう。だるま落としと剣玉。人に当たると危ないので、実演しながら注意を促す。子ども達の番。おそるおそる、だるま落としに挑戦している。スピードがなく、なかなかうまくできない。剣玉は、もっと難しそうだった。一巡後、おもちゃ作りに挑戦する。竹トンボ(実際には、紙トンボ)である。1年生の生活科で何度か作らせているので、手順は簡単である。相手は6・7年生ということもあって、私の片言の英語でも、黒板に絵を描きながら実演すると理解される。山田先生も、生徒の間を回って手助けしてくれている。そんなとき必ず“Thank you.”の言葉が返ってくるのが嬉しい。厚紙に絵を描き、切れ込みを入れる。ストローを取り付けて飛ばしてみる。1年生は危険防止のため先を丸めたが、高学年なので大丈夫と思っていたが、カウンセラーの先生から助言を受ける。アメリカでは安全指導を徹底しなければならないのだと、実感した。さっきと違い、どの生徒も紙トンボを上手に飛ばすことができ嬉しそうだった。

音楽室に案内され、そこでチェロキーインディアンの歓迎の踊りを教えられる。明日の“Celebrate America Celebrate Japan”で、子ども達といっしょに踊るといふ。簡単な踊りで安心した。演奏も2年生がしていたが、木琴は必要な部分だけ採って並べ替えることができるようになっており、これなら誰でも簡単に弾くことができると感心した。

K1(幼稚園年少)23名のクラスを訪問する。ここには先生が二人、まず先生の一人は子どもたちの名前が書かれたカードを持ち、それを読ませている。自分の名前のカードや友達の名前のカードを読む練習をしている。その後カードの上に薄い紙を置き、なぞりがきをさせている。もう一人の先生も、色板の形合わせや数並べなどの個別指導をしている。ボランティアの母親が一人、机に数人の子ども達を集めて勉強を教えている。絵を見せながら“Who is this?”子どもはプリントに色を塗っている。個別指導を終えた先生が、教



室の説明をしてくださる。教室はそれぞれの目的でコーナーに分かれている。例えば自然コーナーには、岩石やスズメバチや木の実の標本や拡大レンズが置かれている。house & living skillはままごと、りんごの切り方や赤ちゃんの世話の仕方やログハウスの組み立ての方法を学ぶ。積み木は工作コーナーである。アートやゲームのコーナーもある。磁石を使って遊んだり、てこや振り子で実験している子がいる。幼稚園から学習環境に注意を払い、子どもが遊びながら色々なことを学んでいけるように工夫されていた。突然、鈴が鳴らされた。みんながそちらを向くと、女の子が二人。「私たちは、ワールドパズルを作りました。見てください」また、それぞれの活動が始まる。日本では自由保育が全盛だが、ここでは修学前教育ということに力点が置かれているように感じた。月曜日は算数と国語、火曜日はanything、水曜日は音楽と体育というように計画されているらしい。ただ、子ども達はほとんど教室で暮らしており、外で自由に遊ぶことなどは少ないように感じた。

1年生は23名、ここでも4グループに分かれてのグループ学習が行われている。半円形のグループ学習用の机が二つ。コンピューター用の机が2カ所、作業用の机が一つ。教室の前にはカーペットをひいた場所がある。書棚とクラフトヒストリーの棚が置かれている。教室の奥にはトイレと手洗いも見える。休み時間がないため、トイレは自由に行くことになる。そのため低学年では教室にトイレが隣接しているのだろう。先生は二人。一人は7人の子どもを集めてwritingの勉強。一人は4人の子ども達とreadingの勉強をしている。作業机の子ども達はプリント学習。コンピューターはサイレンスヘッドホンをして学習している。絵と言葉のマッチングや引き算の計算など、ソフトはそれぞれ個々のものである。教室の前で、たった一人で絵本を読んでいる子が目を引いた。詳しく観察すると、どうやらCDブックに合わせて絵本を読んでいるようだ。ミュージカル風になっているらしく、足でリズムをとりながら小さな声で口ずさんでいる。何分かすると、先生の合図でグループが移動する。コンピューターのグループはreadingへと向かう。先生に少しお話を聞くことができた。今日の学習予定のプリントを見せながら、説明して下さった。30分おきに、学習内容が設定されている。日本は一律45分だが、各教師が時間を設定

できるため30分授業も可能である。これは子どもの発達に合わせて授業時間を設定することができるので、いいことだと思った。ただし、授業予定は校長に提出しなければならず、教師が自由に変更することはできないそうだ。国語の勉強については、本を読むことが中心となる。readingでは教師が課題の本を与え、個別に音読させたりその内容を確認したりする。そのためみんなで話し合うという活動はとっていない。また、このクラスには様々な機種のコピー用紙があり、Anne先生のクラスより多かったのでそのことを訪ねると、ご主人がコンピューター技師で、廃棄になった機械を組み立てて設置してくれたとのことだった。

3年、教室は空だった。体操器具のある野外の小活動場で運動の時間だそうだ。先生が笛を吹くと子ども達が集まり、すぐ国語の授業が始まる。ここでは個別の机がおかれている。教室で円を作り、ゲーム。人形を投げ、受けた人が質問に答える。「～の色は」「～は、何を食べる」その後スベルゲーム。前を向いての一斉授業が始まる。ただし全員ではなく、コンピューターで個別学習をしている生徒がいる。聞くとこれはコンピューターテストのシステムであり、生徒が課題の本を読むと、それをコンピューターに入力、出題される問題に答えていくというものだそうだ。別のコーナーでは、5人の生徒が学習している。その中の一人は教師がずっと付き添っており、常に自分の隣に座らせているので、Exceptional Childrenらしい。日本でいう通級だろう。ここでは教師の手作りのプリントで学習が進められていた。一斉授業の方は、文法の勉強。色画用紙で作った手袋の裏には「I」表には「me」と書かれている。これをはめ、先生の質問に答える。その後、分厚い教科書に書かれた問題を、ノートに解いていた。このクラスの小人病の生徒のため、教師がもう一人いる。

6年、毎週一つの国について学んでいるという。教師が教室の一郭に座り、生徒が思い思いに近くを取り巻いている。机に座っている行儀の悪い生徒もいる。今週は日本、テキストは『浦島太郎』である。教師が読み、一人の生徒が感想を言う。「悲しいけど、難しい話だ」いつ、どこで、という内容を確認しながら、小黒板の前にいる生徒に書かせている。ときには、前に学習したロシアの話なども出てくる。テキストはコピーで挿絵もなく内容も難しそうだ。私は『浦島太郎』

の英語の絵本を持って来ていたので、そのことを告げたが、それを見る必要はないとのことだった。指導内容が決まっているため、余分な時間がとれないためと思われた。

やっと、ランチ。休み時間がとれないのがきつい。ここもやはりバイキング形式である。それぞれの学年でランチタイムや場所が決まっているので、子どもたちもゆっくり休む時間はなさそうである。しかし、早くランチを終えた子が、外でバスケットをしていた。貴重な友達との交流の時間だろう。お金を払おうとしたが、断られた。

午後から、6年の理科の時間、21人、紫外線と赤外線の勉強のようだ。この教室の机の並び方は変わっている。前の2列は対面し、3・4・5列は左を向いている。教師主導の一斉学習で、教師の説明のもと、生徒は教科書を黙読しながら内容を確認していく。教科書は現行のものと、以前のものを同時に使っており、すごいスピードで次々とすすんでいく。先生の質問に、生徒が一斉に答える。ラジオメーターで光についての説明が終わったと思ったら、紫外線と皮膚の害、次には光の波長と色、光の透過性へと進んでいく。どの教室も静かだが教師によって教室の雰囲気は違う。このクラスは厳粛という言葉がぴったりだと感じた。私たちも緊張しながら授業を受けた。Fouts先生は、この学校で30年近く勤務しており、ずっと6年を担任している。自分の今までのデータを蓄積しており、担当学年が変わる日本のシステムには疑問を持っていた。つまりスペシャリストに成り得ないということだろう。後に質問を受けたとき『指導学年が変わる日本のシステムにはよい面もある。子どもの心的知的発達を教師が現実にみることがある。また、教科の異学年とのつながりを知ることによって、系統だった指導が可能になる。それらに合わせて授業を組み立て、工夫することができる』と答えた。

美術は3年生。イースターにあわせて、画用紙でエッグを作っている。それにカッターで切れ込みを入れ、別の細長い画用紙を通していくというものだった。日本でも、昔やったことがある。1時間ぐらいで完成するので、早くできた者は自由に絵を描き、私たちにプレゼントしてくれた。

コンピュータールームでは2年生が勉強中。マッキントッシュが30台ほどある。ソフトは多いらしく、質

間しようとしたが時間切れとなってしまった。その後図書室へ。司書の先生は一人。校内放送も受けもっており、大変忙しそうだった。

Anne先生の部屋で休憩、先生の生徒が調べた日本のレポートを見せてもらう。レポートはすべてコンピューターで仕上げている。インターネットや先生の持っている資料から集材したようである。相撲や行事・神社仏閣など、日本の文化や歴史について調べたものも多かった。地理について調べたものは手書きの日本地図が正確に書かれていた。

最後に図書室で教師や保護者による歓迎会があった。保護者手作りのクッキーが置かれている。このクッキーは、毎日子ども達にも売られており、そのお金は学校に寄付されているそうだ。帰り、玄関のロビーでダンスグループが練習しているのを見る。

夕食後は、いつものミーティング。各校で、かなり違いがある。香川先生の行かれた学校は山間の小規模校でアットホームな雰囲気であるが、川上先生の学校は統一テストの優秀校で、非常に厳しい指導をしているようだった。川上先生が、アメリカの学校について『フェア』という言葉を出された。これをキーワードして、アメリカの教育を考える視点としていく。明日は、今度日本に来られるBates先生の教室で書道の授業を頼まれた。これは山田先生が主で私が助手を務めることにする。授業の進め方を日本で打ち合わせしておいたが、教室が汚れるので新聞紙と生徒には美術用のスモックの準備をお願いした。その後Assemblyだが、Anne先生のお話によると郡の教育長なども招待し、盛大な催しになるそうである。世羅先生と小野先生もいらっしゃるようになった。通訳として、三枝子さんも来てくださるらしい。Anne先生からは話はなかったが、突然スピーチを頼まれても私はできない。2日目では、紹介式用のは使えない。そこで小野先生をお願いして、式の始め用と終わり用の2種類を用意していただき、発音も直していただいた。その夜は、ひたすらスピーチの練習する私だった。しかし、明日雪なら学校は休みである。

### 3月28日(水)

7時30分、いつもの通りAnne先生が迎えに来てくださる。今日が本番ということでAnne先生も緊張している。私たちは習字のため、昨日いただいた学校のマス

コットがついたTシャツに、これも校長先生にいただいた木彫りのハート、それにズボンである。

通訳の三枝子さんもいるので、今日の授業は心強い。4年生、教室の床に新聞紙をしく。まず山田先生がいくつかの色紙を見せながら、説明する。その間に私は墨や筆の用意。山田先生が『山』『川』等の字を説明するのに合わせて、私が黒板に絵を描く。今日の課題の『山』を提示する。グループごとに書き始める。水書用紙で練習してから、半紙に墨汁で書いていく。二人で個人指導していく。筆の持ち方もぎこちなく、筆を立てて書くのが難しそう。全員が何枚か書き終わる。その後大きな紙に『夢』の字を書くデモンストレーション。これは山田先生にしかできない。Bates先生も生徒達も、初めて見る大筆にびっくりしている。授業後、後始末の時間が無く、私たちは着替えのためAnne先生の部屋へと急いだ。

3年の算数。かけ算の勉強をしている。九九の歌を歌った後、教室の一郭に集まり、教師の問題に答える。教師がカエルの人形を投げ、受けた者が答える。席に戻り、かけ算の筆算の勉強。生徒はそれぞれ違った数字の書かれたカードを配られる。教師の出した問題を解いて、答えが自分の持っているカードと同じなら、教師にカードを持っていく。同じ数字は二枚あり、早く届けた方が勝ちとなり、教師に褒美のおやつをもらうことができる。基礎を大事にしていること・ゲームを取り入れて、生徒の意欲を引き出している点などに感心する。カフェに行く途中、廊下でインディアンや中性イギリスの衣装をつけている子ども達を見て、Assemblyは私の予想していたものより本格的なものであることを知る。

体育館でAssemblyが始まる。収納式の階段状の椅子が出されており、1列目中央に来賓や私たちが座る。出入り口近くにもいすが置かれ、保護者が出入りしている。保護者の数は、それほど多くないようである。フロア部分の広さは、バスケットコート一つ分である。

Anne先生が着物を着て、司会をしている。アメリカ国家に続いて君が代の斉唱。君が代は2回繰り返された。短いので、きっと2番があると思われたのだろう。幼稚園の子どもに星条旗と日の丸の印刷された旗を渡される。ジャクソン郡教育長・校長・副校長・カフェのマネージャー・生徒会長と歓迎の挨拶が続く。『彼女たちは、今朝、昨日プレゼントしたTシャツを着てい

たが、それはあまりにも大きすぎる』ということで、新しいポロシャツをプレゼントしてくれたのは校長先生。『昨日、彼女たちは昼食のお金を払おうとしたが、その必要はない。今日のランチは、みんな箸を使って食べよう』と言ってくださったのはカフェのBurnsさんである。彼女も長年この学校に勤めていて、生徒によく声をかけているお母さんのような存在である。教師の誕生日には、大きなケーキをやいてくれるそうだ。

- Awa Odorri 日本 (7年)
- Hey Yo Ganawah チェロキーの友好の踊り (4年)
- Tue Tue ガーナの踊り (6年)
- La Raspa メキシコ (4年)
- The Black Nag イギリス中世の踊り (5年)
- Cowboy Cha Cha, Boot Scootin Boogie, Rebel Start アメリカ (7・8年)
- Regtime Annie, Appalachian Clogging  
この地域の踊り (Cullowhee Valley Clogging Team)
- You Make Me Feel Like a Womann (チアリーダー)

と出し物は続く。インディアンならチェロキーのネックレス、メキシコならレッドペッパー・アメリカならバンダナというように、それぞれから心のこもった贈り物もいただいた。どのダンスも衣装を身につけ本格的だが、7・8年生の踊ったカウボーイダンスはとても人気があるようで、すごい声援だった。カウボーイハットとジーンズでポーズをとって音楽が始まるのを待っているとき、突然轟音とともに前を横切って行ったスケーターや大型三輪車は、ハンディキャップクラスの生徒達だった。学校の生徒が、このAssemblyに何らかの形で参加できるように、様々な配慮がなされているのを感じた。最後にAnne先生の指導したオペレッタが始まった。

- The Stone Cuter 日本の寓話  
演技・ダンス (6年) 演奏 (5年)  
ナレーションに合わせて演技が進んでいく。石切(石工)のトウサクは、神様に頼んで、次々と自分を変えていく。金持ち・王様・太陽・雲・風。しかし、最後にはもとの石切に戻ることを願うという話である。『金色の魚』と『ねずみの嫁入り』が合わさったような話であるが、聞いたことがない。しかしアメリカでは日

本のお話とされているようである。バレエダンサーや傘を使ったの踊り、日本と中国を合わせたような踊りや衣装・音楽だが、東洋的な雰囲気が出るようにとても工夫されていた。

最後に私たちのお礼の言葉。感動と緊張で、せっかく練習してきたスピーチも、うまくしゃべることができなかった。校長先生が挨拶しているが、生徒達は教師に連れられて退場していく。ランチの時間をきちんと守るためらしい。

ランチは来賓の方達といただいた。教育長は、日本の研修制度にとっても興味をもっておられた。そのことについての考えを尋ねられた。授業のテクニックは本で読んだり発表を聞いたりするだけでは、身につけることは難しい。プリント・黒板の使い方・発問の仕方・児童の反応など、本物の授業を見ることが、1番勉強になる。また、異学年の生徒を知ることでもできること、教師間のつながりもでき、学校の協力体制がとりやすいことなども答えた。

この日に渡された予定表は、下の通りだが、Assemblyや急な変更があったりしたので、正確ではない。

ランチの後、1年の先生にお話を聞く。2年では、ウサギの劇を見せてもらう。幼稚園では、ギターに似たこの地方の楽器を演奏してもらう。私たちに、ぜひ聞かせたかったとのこと。子ども達もこの歌が大好きで、一緒に歌を歌ってくれた。その後DDCへ。教育のためのこの地域のボランティアの団体で、奨学金なども拠出しているそうである。今回はアヒルゲームのあひるを2ドルで買った。これを川から流し、1位になったアヒルの持ち主には賞金が入るといふ。私の養子(アヒル)の名前は“イチパン”である。Anne先生の部屋で新聞社の簡単な取材の後、ハンディキャップクラス

#### WEDNESDAY'S SCHEDULE

8:00- 9:00	BATES (4)
9:00- 9:45	ROBERSON (3) (BREAK)
10:00-11:15	ASSEMBLY
11:30-12:30	LUNCH
12:30- 1:00	MIDDLETON (1)
1:00- 1:30	GRAHAM (2)
1:30- 2:15	FULK (4)
2:15- 3:00	DDC

へ。生徒が焼いたというクッキーをごちそうしてもらおう。この地方には特別な施設はなく、全員この学校に入る。そのためのカウンセリングや専門家からの助言など、子ども一人一人に合わせた指導ができるようになっている。ハンディキャップを、子ども達や周りの大人も個性としてとらえており、できるだけ早くからそれに応じた教育が受けられるような制度が整っている。

Anne先生に、今日のCelebrate等についてお話を聞く。1月から練習し始めたそうで、ダンスは体育で歌や演奏は音楽でしたそうだ。ドラマはAnne先生の指導による。その他、日本とアメリカの教育の違いについても話す。分からない子どもを指導するための部屋が、アメリカにはあること。日本とは違い休み時間がないため、子ども同士で遊ぶ機会が少ないこと。そのため子どもたちは体育の時間などに協力について学ぶこと。差別と貧富の差が激しく、違いをほめるようにしていることなどである。1年生の教室には個人用の机がないので、全授業がグループ学習なのかを尋ねた。1年生はグループ学習が主で、2年生からは一斉授業が始まる。ただし、授業は各教師に任されているので、はっきりとは分からないとのことだった。学校では研修活動はなく、他の教師の授業を見ることがないので、仕方のないことだろう。3年以下にアシスタントがつくが、私の見る限りでは、その仕事は授業準備や個人指導・グループ指導に向けられていた。授業は、あくまで担任教師の役割である。これは日本の T.T. とは違う。それぞれの役割というのが、明確に分けられているように感じた。ボランティアティチャーは、保護者に頼むときが多いが、その内容は事前に知らせておくという。補教というものがなかったので、教師が休むことが分かっているときなどは、教師はあらかじめボランティアの依頼をしておくそうだ。

夕食のあと、ミーティング。世羅先生が今日の Assembly に感激しており、あの取り組みが総合単元だとの感想を述べられていた。

#### 3月29日(木)

最初はAnne先生のクラスで書道の授業を行う。今回は私が指導者となる。6・7年生が対象なので、先の授業より、少し内容を変える。まず自己紹介、山田先生が書道の教師であり、私は日本語の教師であると話

#### THURSDAY'S SCHEDULE

8:00-9:00	LOUGHLIN (AG)
9:00-9:30	MADILL (副校長)
9:30-10:00	CAMERON (3)
10:00-10:30	NINCEY (体育)
10:30-11:00	FULK (4)
11:00-11:30	COX (5)
11:30-12:15	LUNCH
12:15-12:45	DOUGHLIN (1)
12:45-1:15	LOUGHLIN
1:15-2:15	WEST (7)
2:15-3:00	BAND/CHORUS

す。

日本にはひらがな・かたかな・漢字・ローマ字が使われており、漢字の中には風景からできたものがあることを知らせる。今から、教師の出すカードに書かれた漢字を見て、黒板の描かれた絵から答えを探すゲームをすることを知らせる。カードは山・川・火・口・木・林・森の7枚である。林と森は、どちらもForestになるが、林より森が広いときに使われると説明する。漢字は一つの漢字でも数種の読み方があり、反対に同じ読み方で違う漢字があること。同じ漢字でも、楷書・行書・草書と書き方に違いがあること。口・日・目のように、似た漢字があること。1年生でひらがな・かたかな・約80の漢字、2年で…3年で…6年までに約1000字の漢字を読めるようになること。新聞を読むには約2000字が読める必要があること。黒板に書きながら簡単に説明したが、漢字の複雑さは分かってもらえたようだ。

今回書く字は山。1年生の授業の要領で“YAMA”と何度も音読させる。次に書き順「1・2・3」右手を出させて一緒に何度か空中に書かせる。生徒は楽しそうにリズムよくしている。音楽の指揮をしているように思えるらしい。実際に書かせてみると、見事に書き順は間違っていた。全員書き終わると、山田先生の大きな字のデモンストレーション。「道」の意味を生徒に話して、授業を終える。

副校長先生は、トランシーバーを手に、いつも校内を巡回している。約束の時間は忙しく、かわりに保育所 (Pre K) の授業を見に行く。先生が名前カードを持っている。子どもは自分のカードが出てくると、自分は何をして遊びたいかを話して、遊びに行く。カー

ドゲームをしたり、水遊びをしたりしている。幼稚園に似ているが、ここには簡易ベッドが積み重ねて置かれている。昼寝の時間があるということだ。教師が二人。一人はメキシコから来た女の子に英語のトレーニングをしている。「保護者が正しい英語を教えることができないのなら、それをするのが私たちの役目だ」と話しておられた。もう一人の先生は、二人の子どもに桃の絵を描かせている。筆をつかって、絵の具で描いている。一人の女の子は大きく、さっさと絵を仕上げ、私たちにを見せてくれた。男の子は小さく経験も少ないらしく、先生が筆に茶色の絵の具をつけ「この枝を描いてごらん」というふうに丁寧に教えてもらっていた。

3年の授業21人。OHPに今日の内容が移されている。キャット・ゲーム、スペルゲーム、書き取りである。スペル キャットとは、スペルに合わせて体を動かすゲームである。その後一人ずつスペルチェックをする。似た発音でスペルのチェックをしているが、算数のプリントをしている生徒がいる。前の課題が残っていたのだろうと、推測した。途中、一人の生徒が本を持って出ていった。これも、特別なカリキュラムに参加するためだろうか。体育の授業を見るのを楽しみにしていたが、音楽に合わせてストレッチ、ランニング、ジェンカ、先生が器具を用意して説明を始めたところで時間が来てしまい、残念だった。

4年の社会の授業。「アメリカを知る」というのがテーマである。まず、歌を歌いながら歴史の勉強する。ハーベイ・オール・バック? きちんと聞き取ることができなかった。前時はノースカロライナの地理について学んだそうだ。グループ対抗の、クイズが始まる。「コンピューターの盛んな場所は」「～は、どの州ですか」内容は、地理・歴史・政治のすべてにわたっていた。

続いて見たのは5年の社会 (ソーシャルサイエンス) である。大きな模造紙を広げ、人物の絵を描いている。プロレスラー・歌手・スポーツ選手など。カナダについて調べるのがテーマだそうだ。まずカナダ出身の有名人を一人ピックアップし、その人について詳しく調べる。例えば生まれた場所なら、地形や特産物・自然環境 (生息する動物・樹木の種類) など、その地方についても調べている。地図で表しているグループもあれば、ジオラマを作っているグループもあった。活躍した時代と、その当時の様子、政治や文化などについても調べている。調べる方法は、コンピューター・

ビデオ・マガジン・本・新聞などだそうだ。自由に図書室に行ってもよいことになっている。

午後1番は、1年生。カーベットのコーナーに輪になって座っている。教師とインターン（W.C.U. 4年生）・ボランティアの保護者が一人。『ぼくの、好きなもの』『わたしのなりたいもの』の作文発表。コンピューターの技師・ストーリー・テラーなど。次にそれぞれが『学校で好きなもの』に答える。本を読むこと・国語・絵を描く・コンピューターゲームなど。次に私たちが日本の子ども達についてのQ&A。持ってきていた資料を使って説明する。最後にインターンが絵本の読み聞かせをする。日本の民話を読んでもらいたかったが、予定は決まっているとのことだった。読み聞かせ用の本は専用の台に置かれていたが、一般の本の4倍ぐらいの大きさがあり、字も全員が読めるほどの大きさである。時々、子どもも口を合わせて読んでいた。人気のある本のようなだった。

Anne先生のクラスで書道の後かたづけをした後、7年で折り紙の授業をする。日本の遊びというテーマで授業しようとしたが、このクラスではずっと折り紙を続けているということで、折り紙のみの授業を希望していた。なるほど、黒板には鶴やカエルなどの折り紙作品が張られている。準備の机には正方形に切られたクラフト紙と、英語の折り紙の本が何冊か置かれてあった。ざっと見て実力をはかり、何を作るか決める。まず私が作ったいくつかの作品を見せる。折り羽鶴を見て“Beautiful”の声があがる。特に素材となる折り紙に特別な紙を使っているの、そちらに対する興味が強いようだ。セミ・シャツ・金魚・鳩。百合の花を出したとき『先生、見てください。Flowerです』と叫ぶ女生徒。新聞社の取材のとき、一緒に写真を撮った生徒だった。West先生も、急いで本のあるページを指さす。どうやら百合が気に入って何度も作ろうと試みたが、だめだったらしい。『教えることはできるが、作るのはとても難しい』と言うと、“I see.”と諦めたようだった。易しいものから作ることにする。用意した折り紙を配ろうとすると、『用意してある』と各自の机に置かれたクラフト紙を示す。それでは固すぎて折りにくいことを言って、折り紙を配る。金紙などの光る紙・千代紙などの模様のある紙・ほかしなどの和紙の特徴のある紙など、嬉しそうにはしゃぎながら選んでいる。大人っぽい生徒が、とても無邪気に見えた。まず、セ

ミ。全員すぐに作れたので、金魚に挑戦する。『兜と同じみたい』さっきの彼女の声。尾の切れ込みに少し手間取るが、全員完成。そこで折り羽鶴を指さし『難しいけど、挑戦する』と尋ねると、嬉しそうにうなづく。これはさすがに難しく、特に羽の折り方に苦労していた。説明の仕方も難しく、West先生に説明を手伝ってもらおうと見てみると、先生の方が夢中で折っていた。何人かに手助けすると、その生徒が友達に教えていた。笑ってしまったのは、『教えてくれ』と私に頼みに来た子が、私の折った鶴を持って、違う彼女に『俺、折れるぜ。教えてやろうか』と口説いていたことだった。山田先生は紙風船などを教えたが、膨らませて手ではじいたり楽しそうだった。

最後に7・8年、55人の音楽の授業。発声練習では、音階を変えたり、早口でしたり、口の開け方に気をつけていた。その後パッハの4重合唱の練習をする。隣の教室では、楽器を使った練習。こちらは初めて楽器に触った者もいるということだった。

下校風景を写真に納めるために、バス乗り場に急ぐ。14台のスクールバスが、次々と来る。スクールバスはここでも黄色だった。保育所や幼稚園の生徒は、教師に連れられて来る。二人の教師がロープの両端を持ち、その間を生徒がロープを持って歩く。アメリカではよく見る風景である。1列に歩く練習と、迷子の防止のためである。

5時、カリキュラム フェアを見学するためFairviewへ。カフェで夕食をとる。ホットドッグとポテトチップなど。家族連れが続々と集まってきている。6時には体育館で開会行事。校長先生のスピーチや国歌斉唱など。その後、自由に見学する。作文や絵本・図工の作品やノートが掲示してある、ドラマを実演しているクラス。作文をビデオにとって流しているクラスなど様々である。ピエロが文具をプレゼントしたり、学校の菜を作るコーナーもあった。

8時前にはホールに帰って、ミーティング。明日はホームステイなので、荷物の準備をして就寝する。

### 3月30日（金）

今日はCullowhee最後の日である。お世話になった先生にお礼に回ったり、撮り忘れた場所を写真に納めたりと、やりたいことはたくさんある。

生徒が一人、私たちの行きたい場所へ、案内してく

FRIDAY'S SCHEDULE

8:00- 8:15	PICTURE TAKING
8:15- 9:00	CHEATHAM (5)
9:00- 9:15	BREAK
9:15-10:00	HOOPER (2)
10:00-10:15	PICTURE TAKING
10:15-10:45	NORMAN (6)
10:45-11:05	NICHOLSON (言語)
11:05-11:25	SUMMARY/QUESTION (校長)
11:30-12:00	LUNCH
12 NOON	DEPART FOR W. C. U

れる。昨日絵本をいただいた1年生、楽しい演奏を聴かせていただいた幼稚園に心ばかりの品を渡す。

全部周り終わらないうちに時間が来て、5年の教室へと急ぐ。円になってのゲーム。『好きな本は』など、私たちとの交流のためのようだ。算数の授業で、4桁+3桁。日本とは進み方がかなり違う。何人かが黒板に出て、課題の問題を解いている。その後みんなで解き方を暗唱する。アメリカの方が早くから教育を実施し、基礎を繰り返し教えている。しかし、Cheatham先生は、日本の生徒が算数の能力が高いので見習いたいという。日本では幼稚園で勉強を教えないが、入学前にはほとんどの生徒がひらがなの読み書きや数の教え方の知識を持っている。アメリカでは家庭で教育を得られないことが多いので、学校で教える必要があるのではないかと思った。今の日本の教育には、塾や家庭学習も欠かせないものになっているのかもしれない。

2年の理科の実験。この学校には二つの理科実験室があり、1年～3年が低学年用理科室を使用している。通常教室の半分ほどの細長い教室である。今日は卵の勉強で、卵の作りのプリントなどを渡された。ビーズや紙などが入った10個の卵が、3～4人のグループに1組用意されており、生徒は振ったり重さを手で確かめながらプリントに記号を書き入れていく。感覚などの情報収集活動の勉強だろうか。その後生卵とゆで卵の見分け方となる。卵を回し、回ったのと回らなかったのとどちらがゆで卵だと思うか、その理由はなぜか、と授業を進めていく。教師が水槽に卵を沈めたとき、校内放送。避難訓練だ。

10:10 校長先生の放送 10:15 避難 10:20 教室へ戻る 放送で子ども達は歩いて逃げ始める。理科室の近くに非常口があるので、すぐ近くの丘に出る。

他のクラスも出て来るが、1カ所に集まったりしない。訓練が終わると、教室へ戻る。放送で、校長先生が今日の訓練について話している。生徒達は、次の授業の場所へと、慌ただしそうだった。月に1度は、こうした訓練があるらしい。

6年の国語(Reading) "STONE FOX" 81ページの新書版をテキストとして利用している。それは教師が選び、児童に渡すテキストも教師の私物だという話だった。歴史・物語・科学読み物など、テキストとなるたくさんの資料を収集していた。教師主導の授業で、誰が・いつ・どこでと、あらすじを押さえる授業だった。話し合いをするときもあるが、ディベートはやっていないということである。今までのどのクラスでも、話し合いをほとんど見ていない。統一テストなどのために知識偏重で、ディベートなどの活動が少なくなっているのかもしれないと思った。

言葉の教室は1対1でおこなわれており、時計の読み方やカードを使ったゲームなど。日本とよく似た活動である。1日に30分こうした指導を受ける。1年に1回は専門家S. L. P. (Speech Language Pathologist) によるチェックを受ける。Nicholson先生はスピーチサイエンスの勉強をした、スピーチセラピストである。

校長室で、学校の資料をいただく。今日は校長先生の誕生日だそうで、カフェからケーキが届いていた。ランチの後、Anne先生にせかされて、玄関へ。見るとたくさんの子ども達が見送りのために並んでいる。今日は午前中授業なのだが、希望者を募ったとのことで、感激した。生徒達と握手をして別れを惜しむ。山田先生も、生徒達に埋もれ、どこにいるのか分からないくらいだ。敏声の中、学校を後にする。

夕方まで、W. C. U. のショップで土産物を探す。Anne先生の迎いで、先生のお宅を訪問する。山頂にあり、ベランダからの眺めが素晴らしい。Anne先生ご夫婦・Batesさんご夫婦・Laura・山田先生・私の7人でディナーだった。私のホストのLauraは、チェロキー小学校の教師1年目で、美術が専門である。大きな犬と、一人暮らしをしていた。自分の油絵や彫刻などのたくさんの作品を見せてもらった。チェロキー小学校の話も聞いた。学校でのチェロキーのお祭りの写真を見せてもらった。みんな民族衣装を着ているが、ポンチョに似ていて、celebrateとは違った衣装だった。チェロキーは黒髪・黒い目の者だけでなく、金髪・碧眼の

者もいた。チェロキー小学校では、チェロキーの言葉や歴史を教える教科もあるそうだ。高学年になるにつれて、子どもは閉鎖的になるらしい。チェロキーの世界を出ても、また戻ってくる者が多いという。アメリカの差別はなくなっていないのだと感じた。美術については、絵を描いたり粘土を教えたりしていて、染色も教えたいと言っていた。日本で言う造形遊びというものはなく、それが何かと説明するのに苦労した。色々な例をあげて、日本の小学校の取り組みを話したが、『遊び』は学校でする教科ではないと笑っていた。この地方では、私たちが受けてきたような美術教育がそのままおこなわれているようだ。

### 3月31日（土）

Batesさんと二人の娘さんと山田先生が迎えに来る。車中でゴミのことについて尋ねた。燃えるゴミも生ゴミも不燃ゴミも、全部同じゴミ箱に捨てていたためだ。聞くと、大きな穴を掘って埋めるそうだ。日本も数年前まではそうだったが、今では分別が徹底していると話すと、それが正しいと大きく頷いていた。一般にはゴミに対する知識は乏しく、高等教育を受けた者の中では深刻に話されているようだった。チェロキーミュージアムの見学をする。ここは、よく遠足に来る場所だそうだ。教師は無料である。私たちも、日本の教師なので無料だった。教育に力を入れているのが、こんなことから分かる。次にカジノに挑戦。やり方が分からない。隣の人が親切に教えてくれるが、やはり無理だった。痛みの少ないうちに諦める。午後からは、Lauraはサマリーの準備。私たち5人で、スモークマウンテンに登る。日本の山と違って、かなり平坦である。道しるべのないところが多く、滝への降り口を見つけるのには記憶が頼りだった。

Batesさんの家へ帰宅。やはり山の上である。Batesさん宅は、日本の建築様式と似ていた。室内では靴を脱ぐようにしており、犬は室内には入れず駐車場で飼っている。トイレとバスも独立したものとなっていた。見せる時間がなかった山田先生持参のビデオをみんなで見ると、Batesさんのご主人は樹木を専門としており、大麻神社の楠が映ると身を乗り出して見ていた。徳島には日本でも有数の樹齢をほこる木が数多く存在するが、樹木の名前が英語にならず、うまく説明することができなかった。これは学校でも感じたことである。

私たちは自分の知りたいことをうまく説明することができず、アメリカの人の言葉を正確に知ることができなかった。また、それ以上に子どもとの会話が成立しにくかった。大人は私たちの言葉を理解しようと推測してくれるし、私たちに分かる言葉で話そうと言葉を選んでくれる。しかし、子ども達はそうではない。話が通じないと、すぐ諦め去ってしまう。ふがいない思いをしたことが、たくさんあった。やはり互いに分かり合うには、言葉が大事なのだと実感した。

Lauraさんを迎えてディナー。明日から夏時間である。みんなで時計の針を1時間早める。

### 4月1日（日）

Batesさんの車で、ベルトモアハウスへ。広大な敷地と豪華な邸宅を築いたのが樹だと聞いて、びっくりする。森というものが、アメリカでは大切にされているらしい。ランチの後、待ち合わせ場所の駐車場へ。

車の中でW. C. U. グループの発表のミーティング。香川先生が発表の柱について、考えてくれていた。テーマは、川上先生提唱のFairに決まるが、インパクトのある表題が決まらず、これは小野先生に力を借りることにする。私が主張したのは、大学院のレポートのときによく言われたこと『妥当性・客観性・信頼性』と『それがどんな価値を持つか』である。私たちが見たアメリカの1部の現状について、私たちの主観による報告であることを始めに主張しておくこと。アメリカの教育に対して私たちが感じた疑問も、率直に投げかけること。また、日米を比較して、それぞれのよさを明確にすることで、両国の今後の教育や交流に役立つような提案がしたいこと。どの先生もそれは感じていたようで、問題点（悪いところ）を発表するのは失礼ではという慎重論も出たが、W. C. U. グループの特色が出ていだろうということになった。まず、テーマをいくつかの項目に分け、それについて自分の観察したことや考えを筆記していく。その後、自分の発表分を決め、先ほどの8人のレポートをもとにまとめていくことになった。

夕食後、1室に集まって発表の用意をする。私は自分の分担を発表原稿にまとめるだけなので、それほど時間はかからないが、原稿を英訳する小野先生・高木先生・塩田先生、パワーポイントの係の香川先生はほとんど寝る時間はなかったようで、恐縮している。



#### 4月2日(月)

サマリーでの発表。アメリカ側の発表は、ビデオやパワーポイントをつかって、話しかけるという雰囲気である。日本の発表は、どうしても『読む』ことになってしまう。大学院の恩師の先生が『授業はプレゼンでしょ』とおっしゃられていたが、内容を把握している授業に原稿は必要ないが、十分な時間のとれない今回は仕方がないと、私も緊張しながら『読む』ことになった。夕方、州議会見学。

#### 4月3日(火)

午前、エクスポリス博物館と併設するチャータースクールを、見学する。この学校は昨年の一歩も訪れており、昨年のジャーナルに詳しい。チャータースクールということで制約が少なく、カリキュラムには大幅な自由が認められるが、学校の認定資格は1年ごとに見直される。6～8年生を混ぜて、無差別に15人ぐらいのフラインググループを作る。そのグループで、今週の日標の決定や確認をする。テーマ学習は、1年に3～4、ポートフォリオで評価される。文化を中心として、世界と自分たちはどうかかわるかというのが目標となる。外国語教育では、今1番人気があるのはスペイン語だそうである。それはヒスパニック系が増えたことと関係があるらしい。

都市部にあるエクスポリスと郡部にあるCullowheeの違いとして、図書館の有無というのが1番気になった。郡部の小学校では日本の地方図書館に匹敵するほどの規模のものがあるが、エクスポリスには図書館

が無く各教室に書棚があるのみであった。郡部では、ほとんどの生徒がスクールバスで通っている。まとまった居住区というものはあまり存在せず、多くの生徒は広大な地域から集まってくる。つまり生徒にとっては家庭と学校が日常の生活圏となる。したがって文化的刺激を受ける場・情報収集の場というのは、多くは学校の役割にならざるを得ないのではないだろうか。それに反し、都市部の学校では近くに公立図書館や博物館などが多数存在する。知識を得る場として、学校外の機関に多くを得ることができる、そのためだろうか。

博物館には、他の中学生ぐらいの生徒が研修に訪れていた。アンネの展示・水をテーマとするもの・世界のトイレなど、中学から高校までの年齢を対象としているようだった。

午後は、教育委員会で資料の購入。その後、科学博物館・歴史博物館へ。香川先生や森先生は、おもしろい実験器具や資料を夢中で探し求めていた。ここも、入場は無料。たくさん子ども達が見学している。科学博物館の環境展示がすばらしく、動く恐竜などもあり、こちらのほうが子どもには人気だった。その後、ショッピングモールへ。本屋に入ると、同じ内容のものが大きさを変えて何種類も発売されている。テキスト用の簡易版ではなく、プレゼント用として買われているのだろう。用途に合わせて、たくさん種類があるのがうらやましかった。KANKIという鉄板焼きの店で、打ち上げを兼ねて夕食。

おみやげで、荷物の整理がだんだん難しくなる。明日は、帰国。長いフライトが終わると、そこは日本だ。